



【2019/11/06 Release】

01. あなたに
02. Friend
03. 碧い瞳のエリス
04. あの頃へ
05. 月に濡れたふたり
06. 熱視線
07. 好きさ
08. じれったい
09. 微笑みに乾杯
10. 出逢い
11. 行かないで
12. Truth
13. 悲しみにさよなら

全曲 作詞:松井五郎 作曲:玉置浩二

編曲:野崎洋一 02, 04, 05, 10, 11

編曲:河野充生 01, 03, 06, 07, 08, 09, 12, 13

全作詞:松井五郎 全編曲:山川恵津子

2017年の夏。松井五郎さんとの打ち合わせで、森川美穂のカヴァーライブを通して私が感じたことについて、話をしていました。「森川がカヴァーライブで、「Friend」「恋の予感」「ワインレッドの心」「雨」など、歌ったことがあるのですが、玉置浩二さんのメロディーが森川美穂にとってもフィットすると思うんです。五郎さん作品で、森川が歌うといいというおすすめ曲って、ありませんか?」

「月に濡れたふたり」って聴いたことありますか？

こうして、2017年10月のブルースアイで、塩入俊哉さんのピアノと、日本におけるウードの第一人者、常味裕司氏を招き「月に濡れたふたり」を歌いました。とてもよかった。その後もずっと「玉置浩二メロディーと森川美穂」・・・この感覚がずっと私の心の中に、ひっかかるように存在していました。「another Face」はあの頃、発芽したのかもしれませんが。

2016年からマネジメントをスタートさせ、レコーディングとライブを重ねてきました。アルバムも「Life is Beautiful」「BEST COLLECTION Be Free」「female」と3枚リリースして、とてもいい形で進んで来れたと思っていました。

2019年、森川美穂の歌について、以前から考えていた一つのアイデアを実行してみたいと思い始めていました。サウンドにもっと明確な意図をもち、意識的に音を削ぎ落とし、必要最小限のサウンドで森川美穂の歌声を聴いてみたいと感じていました。

森川美穂は、ライブも、そしてレコーディング作品も、音楽をリアルに感じる歌世界を体現できる歌手として、そこにいて欲しい。そんなことを考えていました。

時代としては、よりバーチャルに仮想空間世界が広がっていています。しかし、森川美穂には、もっと歌が、声が、言葉が、胸につき刺さるようにリアルにヒューマンに、手を伸ばせばすぐそこに主人公がいると感じられるような歌を歌ってほしい。そんな事を考えていました。

いつもの夏のコンサートでの、いつも感じていたことがあります。過去のオリジナルを歌うとき、バンドメンバーは、オリジナルのカラフルなサウンドを演奏でなるべく再現しようというサービス精神を発揮してくれます。これが森川美穂のサービス精神に火をつけて、当時のイメージで可愛らしく歌ったりします。

これは本当に必要なことなのだろうか？

私はステージを見ながら、いつも疑問が湧いてくるのでした。もちろん「姫様ズーム・イン」を歌う時には、それはそれで楽しいかもしれませんが、しかし、そうであっても、今の森川美穂の歌い方があるはず。私はずっと、そう思っていました。

基本は、今の森川美穂が過去の歌を歌っているということでもいいと思っていまして、大人の森川美穂が、今の森川のまま自然に歌えるサウンドが欲しい。、、、と、ずっと考えていました。これは、決してサウンドだけの問題ではないのですが、そのきっかけを音の世界観で作ることによって、歌が変わるだろうと感じていたのです。

音の舞台セットや衣装が変わるというイメージです。フリルのついたスカートのようなサウンドではなくて、飾りを削ぎ落とし、リアルでガッシリした骨組みだけサウンドで “今の森川美穂”として歌うことで、本質を浮き上がらせる、、、そんなイメージです。

そこで、音を削ぎ落として、必要最小限で、グルーブを中心にしたサウンドで、森川美穂が歌うというステージを作ってみようと思いました。同時にこの年、2019年には、森川美穂 初のカバーアルバムを作りたいと考えていました。欲張りな私は、これらの目論見を検証すべくライブで同時にやってみようと、ピアノトリオ編成(ドラム、ベース、ピアノ)で、ガツンと歌うカバーライブを計画しました。

頭の中では、3人のスリリングなプレイが鳴り始めていました。そして私の中に張り付いたまま離れない「玉置浩二メロディーと森川美穂」という世界も、このライブに盛り込みました。

「熱視線」 作詞：松井五郎 作曲：玉置浩二
 「好きさ」 作詞：松井五郎 作曲：玉置浩二
 「じれったい」 作詞：松井五郎 作曲：玉置浩二

2019年3月24日 Blues Alley Japan。この3曲を続けて歌ってもらいました。そして、ライブ会場には松井五郎さんに見に来ていただきました。この日のライブで、私が2019年にやるべきことが全て見えました。ぼんやりとしか見えていなかったものにフォーカスがあり、輪郭まではっきりと見えた。そんな感じでした。

数日後、松井五郎さんとの打ち合わせが始まりました。私から相談を持ちかけた計画は、松井五郎さん作詞作品のカヴァーアルバムを作りたいということでスタートしました。

どんなカヴァー作品が森川にあうと思いますか？という質問に、すぐに「月に濡れたふたり」と答えるのは、明確に、森川美穂のイメージを捉えているからです。そして、前年2018年には「female」で、森川美穂の新たな歌世界を見事に開花させてくれました。引き続き2019年も、松井五郎さんの世界を歌うことで、森川美穂のさらに新たな顔を見てみたい。そんな思いで、相談を重ねていきました。

なんせこの時点で、松井五郎作詞作品は、世の中に3,300曲ほどあったと思います。その中から、森川美穂にあう10曲を選んで欲しいというオーダーを出したわけです。無謀なことを頼んだものだと思います。

しかし、実は私の心の中には、もっと無謀な思いが潜んでいました。

作詞：松井五郎 作曲：玉置浩二 作品を、アルバムにしたい。

私の下心は、ここにありました。

しかし、流石にこんな偏った企画を、こちらから持ちかけるのもどうしたものか。ましてや3000曲以上の作品があるわけですから、その中から、選んでもらったほうが、私の思いつきという狭い世界ではなく、森川美穂にとってもっと広がりのあるカヴァー作品集が作れるのではないか。

ここは独りよがりな思い込みはやめて、松井五郎さんにプロデュースをお願いして、客観的に作品を選んでもらおう。このように考え、選曲をお願いしました。

楽曲の絞り込みが始まりました。

女性歌手編で 13作品

男性歌手編で 11作品が、まずは選曲されました。

私も森川さんも、選曲された原曲を聴かせていただき、森川さんの意見を吸い上げ、私はまた1週間後に五郎さんとあって打ち合わせをする。こうして、打ち合わせを重ねていきました。3回目だったか、4回目だったかの打ち合わせで、またもや、奇跡が起こりました。

「西嶋さん、全曲、浩二の曲でやってみましょうか？」

森川美穂の初カヴァーアルバムとして、どんな選曲がいいのか？
 プロデューサーとして、冷静に判断したインパクトのある企画でした。

それにしても、こんなことってあるんですね。私は、飛び上がりたかったのですが、グッと堪えて「いいですね。ぜひ、やらせてください。」なんて冷静を装い、この素晴らしいカバー企画が実現に向かう奇跡に、そして松井五郎さんに感謝をしていました。

私は、喜び勇んで森川さんに電話しました。打ち合わせをしていたら、こんなことになって、あんなことになって、そこで、松井五郎 × 玉置浩二 作品から選曲したカバーアルバム企画にしようというアイデアが出てきたと連絡を入れました。

「すごいですね。わかりました、がんばります。」

冷静に受け止めながらも、きっと森川さんの心の中は、「うひゃー、こりゃ大変なことになった」と思っていたらと思います。こうして、森川美穂の初カバーアルバムは大きな「挑戦」を伴うプログラムとなりました。

ここからの選曲は早かった。アルバム「another Face」の曲順通りに並べられた資料CDRが届きました。

「多めに選んだので、この中から考えてみてください」
「ありがとうございます。全部、やりたいです。」

こうして、全13曲のカバーアルバムとなりました。前作「female」は、プロデュースからレコーディング現場のディレクションまで全てを松井五郎さんをお願いしましたが、今回は、企画、選曲プロデュースを松井五郎さんをお願いし、ディレクションは自分でやりました。

削ぎ落としたサウンドで、できれば現場で同時録音で歌まで録音する目標を掲げて、レコーディングしたかったからです。

選曲された曲を聴き込み、1週間ほど、毎日、思考実験のように頭の中で、楽曲と楽器、編成をイメージし続けました。徐々に、頭の中で、楽曲と楽器のイメージが繋がって行きました。

編成が決まれば、アレンジを誰にするか、そしてアレンジ期間を設け、ミュージシャンのスケジュールとスタジオスケジュール、森川さんのスケジュールをパズルのように組み合わせながら、レコーディングスケジュールを組み上げて行きます。

このレコーディングは、さまざまな意味で、森川美穂をさらに大きく成長させてくれました。削ぎ落としたサウンドの中にあるグルーブを明確に感じ取りながら「同時」に歌うという意味。音の強弱と距離、空間の捉え方と互いの関係。音楽は、interplay<相互作用>で成立しているという、一番大切な事実。

これらのことを、玉置浩二さんの歌から、ひとりだけでの練習から、そしてレコーディング現場で、全身の感覚を研ぎ澄まして歌うことから、体感し掴み取って行きました。

楽器を最小限にすることにより、それぞれの楽器の責任は明確になります。そして、それぞれの楽器の守備範囲が広がります。ミュージシャンたちは、どんなアプローチで演奏するか？ 守備範囲を広く与えられた分、選択肢がふえセンスが試されます。全員が、真剣勝負のレコーディングです。“真剣勝負”は何度も繰り返すことはできません。竹刀を振っているわけではないからです。

この緊張感のあるスタジオの空気は、凜としてとても気持ちのいいものです。全員の感覚が鋭く研ぎ澄まされて行きます。精神を統一し、一人ひとりが音楽と一体となって行きます。

音楽が面白いところは、ひとりでは何もできないところにあると思うのです。

歌っても、聴いてくれる人がいないと、きっと歌わない。

書いても、歌ってくれる人がいないと、きっと書かない。

演奏してくれる人がいないと、歌えない。

録音してくれる人がいないと、CDにならない。

演奏者が集まっても、アレンジされていないと、整った音楽にならない。

スケジュールが合わないと、集まらない。

当たり前のことは、当たり前じゃない。

レコーディング、マスタリング、プレス工場、デザイン、印刷、流通、CDショップ、通信販売、CDプレーヤー、スピーカー、イヤホン、、、

音楽という目に見えない空気の振動が、鼓膜を震わせ、僕らの感情を震わせる。

さまざまなことを、感じ、体験できたレコーディングでした。こうして、3月のBlues Alley のライブで見えた景色が、全て現実になり「another Face」という1枚のCDになりました。

松井五郎プロデュースAlbum

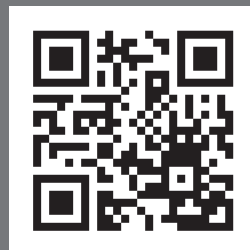
another Face

～ tribute to Goro Matsui + Koji Tamaki ～

Music Video

<https://youtu.be/0eS4ycW0jQw>

森川美穂、松井五郎×玉置浩二を歌う。



次回は、2020年7月リリースアルバム
「森川美穂 VERY BEST SONGS 35」についてレポートします。